

県難言研ニュース

岩手県難聴言語障がい教育研究会事務局(盛岡市立桜城小学校内)

〒020-0022 盛岡市大通 3-8-1 Tel/Fax 019-624-0457

e-mail jimukyoku@iwate-nangen.jp http://www.iwate-nangen.jp

第59回岩手県難聴言語障がい教育研究大会盛岡大会

大会主題 めざす子ども像を明らかにした、自立を促す指導・支援の在り方

1月11日(木)、盛岡市のアイーナを会場に今年度の県難言研盛岡大会が開催されました。今大会は、185名の参加者数でした。開会行事では、外山 敏 会長が開催の挨拶を述べました。また、3名の先生方の功績をたたえ、本会より感謝状が贈られました。

感謝状受賞者の皆様

那須佳織様

鹿野由美様

江六前久実子様



～本会報では、大会の概要やその様子をお知らせいたします～

第1分科会	校長班	助言者	岩手県教育委員会事務局学校教育室 首席指導主事兼特別支援教育課長	佐々木 徹 先生
		発表者	奥州市立胆沢第一小学校 校長	安倍 初雄 先生

○児童に効果的な指導・支援を行うための校長の役割や、親の会との連携の在り方はどうあればよいかについて発表されました。

<助言>

- ・発表校の校内体制が進んでいるのが素晴らしい。
- ・今回のアイデアを持ち帰り、各校で活用してほしい。
- ・他校との連携には、保護者との意思疎通が大切。
- ・通級の必要性和支援内容を理解してもらえるようにしていく。曖昧な紹介ではなく、誤解のないように伝えていく。
- ・親の会への全員参加は難しい面もあり、可能な範囲で規模より回数を重ねていくことも大切。
- ・高校の通級指導は平成30年度から実施される。



第2分科会 (午前)	幼児班	今年度の活動のまとめ、研修会、来年度の活動について
		幼児班は、今年度の活動反省や実践交流を行いました。

○「保育士・教師のためのティーチャーズ・トレーニング」 ～盛岡市教育研究所より～

- ・ペアレントトレーニングが先生方に使えるのでは？(Tトレ)
- ①行動を3つに分ける ②ほめる ③好ましくない行動をへらす
- ④効果的な指示の仕方

○「幼児の言語指導の実際」 ～田口好子先生より～

- ・子どもの指導の適時性を見極めることが大切。実態把握、発達の全体像をみること。
- ・発音指導では、よく見てまねる力をつけさせること。ことばの教室の楽しさと自信をもたせて小学校へ。

○言語発達に関わる教材紹介 ～金子隆子先生より～

- ・かたち いろ ようす クイズ 気持ちを表すカード 等



第2分科会 (午後)	岩手	助言者 盛岡市立杜陵小学校	指導教諭 森田 巧 先生
		発表者 八幡平市立松野小学校	教諭 大志田 美樹子 先生

○通級児童がコミュニケーション能力を高めるための学習活動の工夫、家庭や親学級との連携の在り方について発表しました。

<助言>

- ・実演・インタビューの試みが画期的である。
- ・「めざす子ども像」を地区研として統一したとらえができています。
- ・「お話タイム」は多くのことばの教室で行われている。学習ファイルに記載されていることを話題にしたり、担任と情報交換しつつ保護者へ伝えたりする。時間配分も大切。
- ・連携とは行事だけではない。日々の連携の手立てを考え実践すること。
- ・学習ファイル・・・子どもによって変える。学習の積み重ねを残す。
- ・教室通信・・・連携の一つ。専門性が見える内容も掲載。
- ・授業参観・・・保護者も担任も、実際にみると違ってくる。
- ・即時評価・・・担当との信頼関係が成就感、自信、意欲そして自立につながる。
- ・先人の実践をまねるところから始め、生かしていく。指導する立場を崩さないことが大切。



第3分科会	難聴班	助言者 岩手県立盛岡聴覚支援学校	教諭 細井 一 浩 先生
		発表者 北上市立黒沢尻西小学校	教諭 澤口 貴志 先生

○標準化された検査をもとに、めざす子ども像の指導プログラムを作成し、実践を検証した発表を行いました。午後は、聴覚支援学校教諭である細井先生の「難聴児の言語指導」の資料をもとに研修会を行いました。

<助言>

- ・対象児は軽度難聴児。しっかりアセスメントがとれていたため、子どもが大きく変化した。
- ・児童が話したい、話すことが楽しいと思っていることが成果である。
- ・トピックス(5W1H+他)の活用が有効だった。
- ・子どもが楽しくもっと話したい気持ちになる発問が重要である。
- ・これまでトピックスや読解(絵本)等を丁寧に扱ってきたことが日常生活に生かされている。→ことばの広がりが出てきた。
- ・文法の力をきちんとつけること。(助詞、動詞の活用)
- ・何か一つでも取り組めるものがあると頑張ることができる。意欲的・主体的に自立をめざすことができるようにすること。
- ・自分の障がいを認識すること → 自分から伝える、願ひする



第4分科会	LD班	助言者	二戸市立中央小学校	副校長 森 和佳子 先生
		発表者	一関市立南小学校 北上市立北上中学校	教諭 千葉 秀夫 先生 教諭 柴山 佑美 先生

○午前は、ICT機器の活用や中学校における通級指導教室の役割について発表しました。午後は、実践発表とグループごとの学び合い、来年度の計画について話し合いました。

<助言>

- ・毎年の積み重ね、進歩、深まりが感じられる。
- ・多くの教材の紹介があり、よかった。
- ・通級指導教室が児童生徒の居場所になっており指導支援が素晴らしい。
- ・指導計画により、個の課題、支援方法が明確になっている。
- ・通常学級とのつながりが意識されていてよい。
- ・学力検査等の際、合理的配慮もあればよいのではないか。
- ・通常学級で生かす、生かせるものを学ばせる。
- ・弱さを分かって主張できる子を育てていく。
- ・子どもに視覚化できるもので成果を検証していく。(タイム、グラフ)
- ・イメージ力が弱い子には、タブレットが有効である。



第5分科会	宮古	助言者	岩手県立総合教育センター	研修指導主事 平 浩一 先生
	県北	発表者	岩泉町立岩泉小学校 二戸市立福岡小学校	教諭 畠山 栄美子 先生 教諭 小山 浩司 先生

○宮古地区は、児童が誤り音に気付き正しい発音になおすことができる手立ての工夫を発表しました。

○県北地区は、アセスメントシートを活用し担任等と連携したグループ学習の実践を発表しました。



<宮古地区> 助言

- ・担当して2年目でこの実践は素晴らしい。
- ・ことばの指導は自立活動であり、教科の遅れを補充することとは目的が違う。教科で学んだことを生かすことはできる。
- ・各教科の解説に、障がいのある児童への配慮を示している。
- ・「ことたぶ」について
カメラ・・・口形を比較したい時は担当が撮影するとよい。見る・録音する・拡大するという点でiPadはよい。
- ・巡回指導の際は便利。
- ・活用することで更に指導の効果が上がることを期待している。

<県北地区> 助言

- ・子どもの実態を分析し、必要なことの見立て、見取りをし、岩手県が積み上げてきた「ことばの発音指導」を行うことがよい。
- ・めざす子ども像をしっかりとっておくことが大事。
- ・その子にとって何が必要なのかをアセスメントして組み立てていくこと。
- ・トレーニングから発音指導への切り替えは具体的な言葉で指示(あと○問、あと○分)し、ゴールを知らせる。今していることが何につながっているのかを知らせる。
- ・その子にとって障がい受容のために必要な活動例：コグトレ、ラジコ(スマホ)

第6分科会	気仙	助言者 金沢大学人間社会研究域学校教育系 教授 小林 宏明 先生
	盛岡	発表者 陸前高田市立高田小学校 教諭 伊藤 けいこ 先生 盛岡市立青山小学校 教諭 本宮 江利子 先生

○気仙地区は、場面緘黙児が楽しく学び続けることのできる学習活動の工夫について発表しました。

○盛岡地区は、吃音の児童へのペア学習や担任との連携、指導構想の検討による実践を発表しました。

＜気仙地区＞ 助言

- ・緘黙児への学校での対応は定まっていないが、通級指導での対応が大切である。
- ・不安に配慮しながらできることを増やしていく。家庭環境に学校を近づける。
- ・学級担任との連携や職員との関わりの中で安心できる場や活動が増えている。
- ・好きなこと、得意なことを生かした活動。
- ・保護者間の交流は難しい。茶話会等、交流のきっかけができればよいのでは。



＜盛岡地区＞ 助言

- ・緻密な指導を段階的にすすめている。
- ・細やかな配慮やサポートができています。
- ・ペア学習の関係性が良好で、愚痴る場があるのもよいこと。
- ・本人たちの吃音の受け止め方はどうか。小2はキーポイント。気付いていることが多いので、ずばっと聞いてもよいのでは。
- ・保護者に対して、子どもと吃音について話すことの必要性を伝える場が必要。



第7分科会	花北	助言者 山田町立山田北小学校 副校長 梅野 展和 先生
	両磐	発表者 花巻市立大迫小学校 教諭 中村 健 先生 一関市立室根東小学校 教諭 佐々木 やよえ 先生

○花北地区は、担当者、担任、校内、保護者が連携して取り組みを行った事例を発表しました。

○両磐地区は、構音、吃音、言語発達遅滞、感覚統合についての実践を発表しました。

＜花北地区＞ 助言

- ・難しい子どもだが連携が素晴らしい。情報と課題が共有できている。課題を共有→成果を共有という「サイクル」が大事。
- ・連携のためのアイテムが豊富。役割分担が明確。
- ・何を目安に自己批評しているのか。視覚→聴覚もよい。
- ・気を付けているというのも「終了のめやす」の一つになる。
- ・言葉の理解指導をやるべき。個別指導計画にきちんと位置付けてほしい。
- ・子どもを肯定的に見ると次の指導のステップが見えてくる。

○こうすればできる、ここまでならできる ×できない



<両磐地区> 助言

- ・「キーワード」「考察」「意図」がとてもいいが、「キーワード」は見ただけで分かるものと分からないものがあるため、吟味した方がよい。
- ・「障がい名」よりは課題や指導の過程を記述した方がよいのではないか。
- ・「楽しく学び続ける」について・・・「楽しむ」とは？ 長期にわたる児童の難しさもある。

- 楽しさのレベル
- ①先生との関わり
 - ②ほめられる
 - ③うまくできた

- ・そのためには振り返りが大切。先生が価値付けてあげることによって学ぶ楽しさに気づく。



第8分科会	胆江	助言者	盛岡市立向中野小学校	副校長	杉本光生先生
	上閉伊	発表者	奥州市立衣川小学校 釜石市立釜石小学校	教諭	渡邊久仁恵先生 三上公子先生

○胆江地区は、連携を生かした学習活動の工夫についての授業実践を発表しました。

○上閉伊地区は、家庭、在籍学級、医療等の関係機関と連携した実践について発表しました。



<胆江地区> 助言

- ・一人ひとりをみていく中で限界はあるので、キーワード（何が出来るか）をしっかり押さえ、高められるものを絞っていく。
- ・あとはどこにつなげるのか、どんな資源を使うのかという連携の方法を考えていけばよい。
- ・コーディネーターの先生も含め、職員室の中で良い雰囲気の中でつなげていけるようにしたいものだ。
- ・ことばの教室の中での自立を意識していけばよいのではないか。

<上閉伊地区> 助言

- ・発達的な課題については、保護者の思いや悩みに丁寧寄り添い、親自身が医療機関に相談しようと思うまで待つことが大切。
- ・保護者、近隣の先生とつながりを持ち、相談・連携し合って向き合うこと。
- ・子どもの実態をよくつかむことが大切。
- ・保護者にはプロ意識をもって対応することも必要。(舌が上下左右に動けばことばの指導は可能) 多様なニーズにこたえることも大切である。
- ・自分の個性を大事に。自分らしく対応することも時には必要である。



講話	演題	吃音の理解と指導・支援について その2 ～事例から分かる効果的な学習活動の工夫～
	講師	金沢大学人間社会研究域学校教育系 教授 小林 宏明 氏



○講演会では、昨年度に引き続き小林先生にお越しいただき、吃音について学びました。

○今年度は「吃音のある子どもの支援の実際」として、映像を交えた事例を紹介いただきました。

○VTRでは、実際に小林先生がご指導されている様子が映し出され、具体的な指導の仕方や会話の進め方を知ることができました。またご著書でも紹介されているワークシートの活用方法等も教えていただき、大変参考になりました。

小林先生の児童との関わり方から学ぶことは多く、私たちがこれからの実践に生かすことのできるたくさんの手がかりを教えてくださいました。

2年間に渡りご指導いただき、ありがとうございました。

